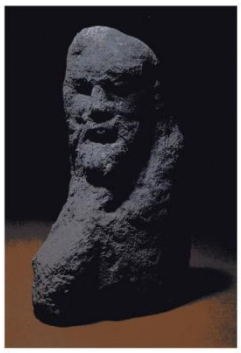
アルフレッド・ジェラールの航跡／シリーズ５

## 「ジェラールの肖像」

### ◎　それは一体の石像から始まった

筆者がジェラールに関心を持ち始めた平成 2 年(1990)頃、未だ日本ではジェラールの肖像は知られていない。唯一、山手資料館に「伝ジェラール像」なる粗彫りの石像があり幾度か足を運んだが、きつい目の表情や豊かな顎鬚が、飛鳥田一雄の描いたジェラール像にそぐわなかった記憶がある。



伝ジェラール像
©山手資料館

この頃、横濱市ならびに横濱開港資料館が水屋敷の構造調査を行い、NHK の TV 番組や朝日新聞の地方版で特集が組まれていたことがその関心の発端だった。元町に越してきたばかりの筆者が、水屋敷と呼ばれる、清水湧出る煉瓦造り工場跡が実は貴重な近代産業遺構であることを知ったのは、この時だった。

一方でジェラールの人物像については、飛鳥田のエッセイのまま、謎に包まれ続けていた。

### ◎　クレットマンに贈られた肖像写真の謎

従って本稿シリーズ２に記載の、帰仏するクレットマンに贈られたジェラールの肖像写真の発見には少なからず驚愕させられた。平成 4 年(1992) には永代借地権の調査によりジェラールの死亡証明書が発見され、その後ランス市での現地調査により、帰国後の後半生を中心とした生涯の骨格が次第に判明してきた後のことである。平成 12 年(2000) 春に開港資料館で開催された特別展「フランス士官が見た明治のニッポン」の会場でこの肖像写真の実物に対面し、筆者は思わず感嘆の声を挙げてしまったほどである。

しかしこの時点でもジェラールの帰国年については不詳であり、明治 23 年(1890) 頃とする説が一般的であった。これが明治 11 年(1878)と特定されるのは、横濱都市発展記念館の青木祐介研究員がブザンヌにあるジェラールの墓石に日本語で刻まれた横濱入港日と出港日の記載を発見する平成 18 年(2006)である。

ところが、この事実を以て改めてクレットマンに贈られたジェラールの肖像写真を見ると、ある謎に直面する。それは裏面に記載された 1878 年 5 月 14 日の日付のことである。これはクレットマンの帰仏時期と一致することが確認されているが、一方で墓石に刻まれた日は「明治 11 年 7 月 1 日横濱出立」。この間僅か１ヶ月半足らずである。近々自らも帰る同じフランスに一足早く帰国しようとする友人に、わざわざ自分の肖像写真を贈るだろうか。「ローニンの国の記念に」という言葉まで添えて。

ジェラールの墓石に刻まれた横濱入来・出立の文字

### ◎　ジェラール帰国の理由は

この謎に尤も応え得る回答があるとすれば、僅か 1 ヶ月半にジェラールに帰仏を迫るある危急な事態が生じた、ということだろう。ジェラールの帰国の理由は分っていない。ジェラール伝の筆者ギュイヤール女史は翌年日本で猛威を奮ったコレラの罹病によるもと想像している。帰国後フランス中部のヴィシー温泉で長期療養を行ったことが根拠になっている。突然の帰国という理由に罹病の可能性は否定できないが、果たして伝染病患者に長期の航海が許されるものだろうか。

明治 12 年(1879)に全国的にコレラが大流行したことは歴史的事実である。荷風 永井壮吉は生涯生水を口にしなかったが、それは彼がこの年に生を受け、両親に厳しく躾けられたものであろう。その流行の猛威が想像できる。

確かに、横濱では比較的流行の兆しが早かったことは、前年 11 月には中華会館より清国領事館を通じ、中国人用の伝染病院用地の貸与が申し出られていることでも分る。つまりもしもジェラールがコレラに罹病したとすれば、かなり早期の段階であったことになる。

### ◎　帰仏後のジェラールの足取り

もうひとつ不思議なのは、帰仏後かなりの期間、ジェラールの足取りが不詳であることだ。明治 24 年(1891)、母方の遠戚にあたり幼馴染でもあった裁判官コンスタン・レクレールの住む、ヴィトリー・レ・ランスの屋敷の２階の「同居人」として住民台帳に記載されるまでの十年余り、ジェラールは永い沈黙の時代を送っているようにも思える。コレラが原因で帰仏したというよりも、長期間の温泉療養など心因性の傷を癒していた可能性もある。罹病したのは、あるいはジェラール自身ではなかった、のではないだろうか。

しかし、後付けでこの十年間を辿ってみると、ジェラールの新たな試行錯誤が見られる。この間、ジェラールには三つの足跡がある。ひとつは、父ジャンが営んでいた市内のパン屋の跡地にビルを建設したこと。ふたつ目は、美術工芸中央連盟主催のパリ博覧会にジェラール瓦・煉瓦を出品して大賞を獲得したこと。そして、最後に、二槽式堆肥溜を発明しパリ万博にその模型を出展したこと、である。

### ◎　「レモア農業サークル」の設立

22 歳で母に死に別れ、25 歳で父の再婚を経験して、ジェラールはランスを旅立つが、その父もジェラールが横濱で新規事業に腐心している最中の慶応 2 年

(1866)、54 歳でこの世を去った。

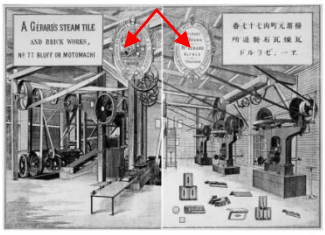
第三者に貸与していたランス市内のパン屋の土地家屋をジェラールが相続することになった。ジェラールはここに 1879 年、硝子屋根と絢爛なアールデコ装飾を施したビルを建築する。そして農業関連を中心とした 25,000 冊の蔵書を集めレモアの農業技術の向上のために科学界・農業界を代表する人々の交流の場を提供することを発案し、実行したのだ。これがジェラールの死後、その遺産をもとにジェラール財団となる「レモア農業サークル」の創設であった。ジェラールの遺言状に基づき遺産管理人に指名されたのが、ヴィトリー・レ・ランスの住人ジュリアン・シャルトンであり、横濱の永代借地権の買戻しの際に遺産相続人として名前の出てくる人物である。

### ◎ パリ第８回美術工芸中央連盟博覧会

前出の青木研究員が詳らかにしている通り、明治 11 年(1978)の帰仏後、ジェラール瓦の販売代理店をバンド 157 番地で営んでいたフランス人レイノーが一時ジェラール商会を経営していたが、明治 15 年(1882)、ドゥヴェーズが経営を引継ぐ。彼も本稿シリーズ４で触れた上海のフランス人ネットワークの一人である。

実はジェラール瓦はジェラールが帰国した 1878 年から 1885 年までの製造年が刻まれた瓦が製造されていない。つまり、ドゥヴェーズが経営を引継ぐまで旧工場の生産ラインがそのまま維持されていたか、一時生産を中断していたことが考えられる。

明治初期のジェラール工場は木造建築だったことから、明治 19 年(1886)に発行された『日本絵入商人録』の有名なジェラール工場の外観図にある煉瓦建工場は、内観図の蒸気機関を含めて、このドゥヴェーズが経営に関与していた時代に再建されたものと考えられる。



「日本絵入商人録」ジェラール工場内観図（矢印が賞牌）

そしてその『日本絵入商人録』の内観図に描かれているのが、明治 17 年(1884)に開催されたパリ第８回美術工芸中央連盟博覧会の工芸陶器部門で、ジェラール瓦・煉瓦が大賞を受賞した際の賞牌なのであった。

ジェラールが日本に在住していたならば、パリの博覧会に何故日本製のジェラール瓦の出展が可能だったかが疑問となるが、ジェラール本人が既に帰仏していたとすれば不思議はない。ジェラールはジェラール商会のオーナーであると同時に、フランスにおける商会のプロモーションの代行をしていたことになる。つまり「ジェラール・ブランド」として確立したジェラール瓦を、経営者としてのドゥヴェーズが更に生産力を高めながら市場に浸透させていったといえる。また、帰仏後もジェラールが商会にしかるべき影響力を保持していたことが伺えるだろう。

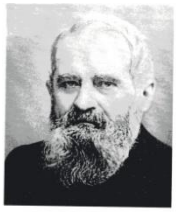
### ◎ 二槽式堆肥溜の発明と普及促進

ジェラールが二槽式堆肥溜を着想したのは、ラヴァンヌの母方の伯母ルイーゼ・シェリュイのもとを訪ねた時だと言われている。ラヴァンヌには彼女の祖父が拓いた大農場があり、ジェラールはその農場で堆肥を作る重労働を見ながら、これを軽減する方法として堆肥溜を着想した。明治 22 年(1889)には本稿シリーズ１で紹介した二槽式堆肥溜の設計図を完成し、同年開催されたパリ万国博覧会でその模型が展示された。最初の堆肥溜はジェラールのふたつの故郷であった、ブザンヌとラヴァンヌに建設された。

ジェラールが実家のパン屋の敷地に新築した図書館で運営が開始された「レモア農業サークル」は、この二槽式堆肥溜を普及促進する目的も担っていた。ジェラールの死後、その遺産によって財団化されることになるが、次稿に見るように、その構想は第一次大戦によって大きな影響を受けることになる。

### ◎ そして再びジェラールの肖像

ジェラールが篤志家として名を残すのは帰仏後のことであり、老年ならびに最晩年の肖像写真は、E.デュポンの伝記にも掲載されている。しかし、クレットマンに贈った肖像写真は、結果的に熟年のジェラールの姿を止める唯一の肖像となったようだ。その発見はランスの関係者も驚かせたに違いない。


晩年のジェラール

筆者が 2007 年にランスを訪ねた際、最後に立ち寄ったのは、ランスの農業関連団体が集結している市郊外の「農業会館」であった。そこに今も「レモア農業サークル／ジェラール財団」がありジェラールの胸像が置かれている。クリスマスで財団のスタッフは休暇中だったが、会館の事務員に頼みこんで図書室の中のジェラールの胸像を見せてもらった。ジェラールが蒐集した膨大な農業関連の図書の中で、ジェラールは豊かな顎鬚を蓄え人柄のよさそうな好々爺の面持ちであった。横濱で撮影された、あの 41 歳の精悍な肖像写真と共通するものがあるとすれば、温厚な中にどこか寂しさを湛えた眼差しであった、かもしれない。

レモア農業サークルのジェラール胸像

［参考資料］
「アルフレッド・ジェラールと瓦工場」（青木祐介／「横浜都市発展記念館紀要第５号」）
”Alfréd Gerard-le champenios de Yokohama” (Huguette Guyard/Presse Mumérique)